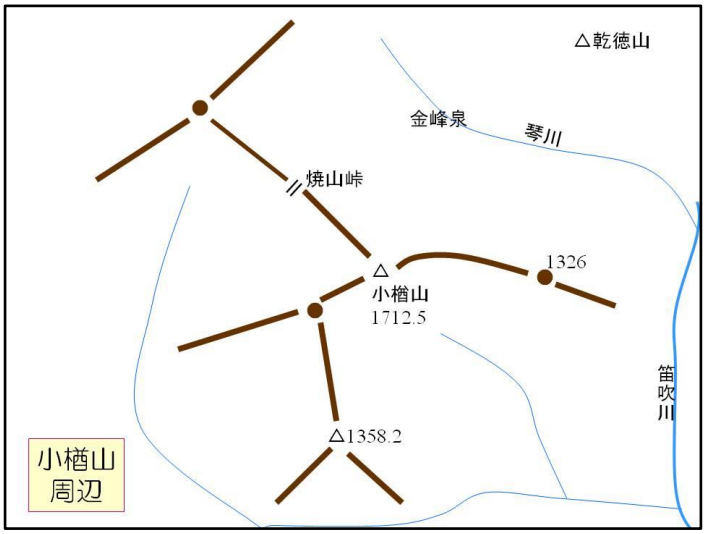
踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

奥秩父	窪平から小楢山（冬山とザイルの基礎訓練）	No.072

四日間の夏山、飯豊縦走が終わったあとの反省会の席で、今冬は「冬山合宿」として同じメンバーで木曽御岳を狙うことが決定した。木曽御岳への夢は去年の冬から続いている。このプランは昭和40年12月にも立てたが、パーティのメンバーに病人が出たため人員不足から中止になった。
風と雪と氷の冬山ではザイルさばきが熟達している必要があり、まずは 10月に草原と岩のある山でトレーニングを行おうということになった。草原と岩場がある山として、中央本線の猿橋駅近くにある九鬼山、大菩薩の雷岩、秩父の小楢山などが候補に挙げられた結果、小楢山が選ばれた。
小楢山は、笛吹川源流の開拓村の奥に立つ海抜 1742mの薮山で、双耳の頂は所々に岩が飛び出し我々が訓練の場所としてあげた条件はほぼ満たされている。国師ケ岳から見ると黒金山、乾徳山と連なる稜線の右に小さく見える山で、杣口に下る長い長い林道とともに記憶の視界に残る山である。
小楢山の北には金峰泉という名前の鉱泉があり、またゆるやかなスロープは「小楢山・乙女高原」と言われ雪さえ多ければスキーもできるようなところのようだ。
メンバーは、飯豊の時のメンバーである恩田、鵜飼、吉野、小林の四人に握り飯を差し入れしてくれた斉藤さんが加わって五名。



昭和41年10月23日
いつもの夜行列車でわずか三時間、眠い目をこすりながら塩山の駅に降りると大菩薩、乾徳に向かう登山客がバス停に行列を作っている。徳和行の満員のバスに乗り込み窪平まで。
夜明け前の窪平は深閑として恐ろしいほどの暗さ。時々聞こえる犬の遠吠えが不気味に闇の世界に亀裂を生じさせる。
窪平は笛吹川源流の天科や広瀬に向かう秩父往還と杣口、塩平へ向かう道との分岐点で、民家も比較的多い。肌寒い夜明け前の空の下で朝食をとり、オリオンやカシオペアの見つめる中の農道を歩き始めた。
歩きながら眠っているのか、眠りながら歩いているのか、時として判断に苦しむ。眠気覚ましに歌っている歌もいつしか途絶え・・・。体が冷えているうちは何となく緊張感があっていいが、温まってくるにつれて足がもつれあうようになってきた。一筋流れる人工衛星の軌跡を見つめては眠気を紛らわせているうちに夜が明けて、甲府盆地のかなたに南アルプスの山並みが浮かび上がってきた。
広い林道に出たところでまずアンザイレンの練習として、四人は 30mのザイルに繋がれた。スタカット、コンティニュアス、ジッヘル・・・。ゆるやかに登る林道で紅葉の林を潜り抜けながら、右手にピッケル左手に12mmのザイル、歩いたり止まったり。時折登ってくる若者達が物珍しそうに眺めながら追い抜いて行く。
そんな登りを続けて、ようやく頂上稜線にたどり着くと陽はすでに頭上近く。双耳のコルの草原で食事が済むと今度はオーバーズボン、オーバーシューズ、オーバー手袋、ヤッケと着込んで、ピッケル、アイゼンに身を固めて西方の岩稜に向かう。
薮が深いのでアイゼンは八本の爪に枯れ草を頬張り、オーバーシューズにはかぎ裂きができてしまうし、思うような練習効果が上らず。最後に、10～15mはあろうと思われる岩壁を見つけて、アンザイレンをしての岩登りの練習をして終了。
結局思ったほどの練習効果は上らぬままに、ザイルとピッケルを持った場違いないでたちで中牧へ下り、塩山行のバスに乗った。

結果的に、あまり自信を得たとは思えない訓練だったせいか、木曽御岳の吹雪の中を息苦しく登る姿を想像しただけで不安になってきた。

以上

（修正・更新：2023年11月）